

バックデータ : <http://www.moreorless.au.com/heroes/rabe.html>

## 20世紀の英雄と殺人犯-----英雄のファイル

ジョン・ラーベ

よいナチ、南京の善人、南京の生きた仏

国家 : 中国、ドイツ

原因 : 南京大虐殺の時、25万以上の中国難民を救った。

バック : 20世紀始めの頃、辛亥革命が清王朝を覆した後の30年間、蒋介石を頭とした中国国民党は最終政権のために、毛沢東を頭とした中国共産党と戦っていた。

中国東海の向こうに、日本が日に日に民主主義化や軍国主義化になっていて、中国では乗ずる隙があるから日清戦争によって満州（今中国東北平原）を占拠し、また第一次世界大戦の間に山東省へ侵入。

ミニ伝記 : 1882年12月23日ドイツのハンブルグに生まれた。父がキャプテンでありながら、商業上の成功を目標としてのラーベはハンブルグで商店の丁稚になって、後ほどアフリカに行った。

1908年旅に中国に来た。

1910年からジーマンスの北京事務所で働いていた。

1927年から29年まで、中国国民党の中国統一を防止するために日本軍が来た。

1928年6月、満州（中国東北部）に駐屯した日本陸軍部隊――関東軍の士官たちは日本の利益や中国との戦争を求めるために、許可されなかった作戦をやり始めたが、日本の高級将領でも中国側でも動員拒否。

（注釈：1928年6月4日の張作霖爆殺事件をさす。奉系軍閥の頭張作霖が国民党の軍隊に負けた後、奉天へ帰る途中、関東軍参謀河本大作らの手で爆殺された。当時田中義一内閣は張政権を立てて満州を中国から分離しようとしたが、国辱遺恨を負っていた張学良が、日本の反対を退けて、1928年末に同文電報を発信して国民政府に合体。南京国民政府はこうして形式的に国家統一を完成。）

1931年9月、関東軍は参謀の謀略計画により柳条湖で満鉄線路を爆破し、中国軍の仕業と偽った、すなわち満州事変である。政府は不拡大方針をとったが現地軍が独走、翌1932年1月までにほぼ東三省を占領、3月1日清朝最後の皇帝溥儀を執政に傀儡国家満州国が建国した。それと同時に、1931年11月ラーベはジーマンスの南京事務所に派遣され、中国の古参駐在員として国民政府へ電話、タービンなど商売をした。

1932年5月犬養毅首相が射殺、軍部内閣の成立を通じて満州国が（軍事）政府に認められた。

1933年ナチスがドイツの政権を手に入れ、1月30日党首ヒトラーが首相となった途端、迅速に国家政権の機構を接管管理。一時ナチスに加入したラーベも、南京支部の指導者一人となった。

1936年11月、「日独反共協定」が締結され、翌年イタリア加入。

1937年7月7日、北京郊外の盧溝橋で、中日両軍の間で小規模な衝突を発端として日中戦争爆発。7月28日、中国軍が北京から退いた。

7月30日、日本軍が天津に侵入。8月13日から上海を目指し、三ヶ月後やっと攻め落とされた。国民党部隊が西北の首都南京へ撤退。

11月から、南京にいた外国人、土地の者及び国民政府が撤退し始めた。総社から撤収に命じられたが、家族を見送ったラーベは、堅持して残ることにした。

日本軍の侵した戦乱時代に中国難民の衣食と住所を提供するため、ラーベは何十人の外国人（殆どドイツやアメリカの宣教師、学者、医者と商人）と一緒に一時的な「安全区」を設立した。11月22日、ラーベがリーダーとして、15人の国際委員会が設立し、安全区を管理し始めた。

西南京に周囲が7平方キロぐらいの地域の中で、各国領事館と南京大学を中心にした二十五箇所のホテルが建てられた。ラーベも自分の家をホテルとして空けておいて、ほぼ650人を収容できるようになった。

12月1日、もし市長と市長の部下も撤収したら「国際委員会」が続いて南京を接收管理できるという、ラーベは南京の市長から承認を授けた。

12月10日、日本軍が南京へ攻撃し始め、三日後陥落。中国軍隊の崩して敗退していたまもなくの間、日本軍隊が六週間も続いていた「南京大虐殺」をやり始めた。

ラーベと他の「国際委員会」のメンバーたちが日本人に会って、「安全区」の状況について説明し、日本軍隊が「安全区」内に侵略しないように要求したが効果は微々たるものである。

「自分の目で見るとまでは、信用できなかった。あいつら（日本兵士）がドアを壊して押し入り、家を焼き払い、金品を略奪した…ドイツ人Kiesslingの喫茶店にも財物を残らず奪い去った…司法部の前に駐在した、千人ぐらい武装解除の兵士から、400人以上が縛りあげられながら追いやられた。機関銃の掃射した声があったので、やつつけたかも。恐ろしくてぞっとした。」と、ラーベ日記の中にそう書いておく。

およそ20万から35万までの中国庶民や降服した兵士を区別問わずに殺した「南京大虐殺」は、20世紀において最も残忍非道な殺戮活動であった。

日本軍隊はまた近郊の町村まで略奪し、中国人の捕虜を残酷な拷問にかけ、焼き払い、首を切り、銃剣でやっつけ、グループで銃殺した。30パーセント以上の建築も破壊された。

年齢を問わず強姦された中国女性がほぼ8万人に達し、また慰安婦に強いられたり、殺されたりしたのも何万人がいった。有史以来最も非道の集団強姦であった。一時的ではなく永遠な収容所となった「安全区」に避難した25万ぐらいの中国人の中で、直ちに撤退できなかった中国兵士もいた。日本軍隊がそれらを引き渡しようとして要求し、そして捜査に数回「安全区」に武力侵入。

「安全区」にいた難民の食品と医療サービスを保証するため、ラーベが友人とともに日本軍隊の暴行を制止しようとし、そして国際社会もこの大虐殺を重視しよう、記録しようとして懸命した。

彼が自分のナチス党員証明書まで利用して、出来るだけ暴行を制止した。友人とともに日本軍隊の行為を記録して日本領事館に報告し、領事の介入をも進んだ。そして殺戮を止めるため、数回ヒトラーに書面を奉った。それと同時に、自分の経験を日記とした。

「日本兵士が三々五々強奪した。また年を問わず、女や娘を強姦して、拒否すると殺す；逃避しようと試みることも拒否とした。陰部がビルの瓶に詰め込まれて竹ざおに突き破られた女性の死体を見たことがあり、その中の瀕死の数人と話したことも。この私が彼女たちの死体を安置所まで送ったので、上記の話がぜったい真実だと誓う。」

「まさかだと思うかもしれないが、安全区内の女子地域（およそ5000人から10000人まで収容）で強姦事件も発生したことがあった。我々外国人がかまわな所など限りがあって、抵抗されると誰でも殺すあいつら完全武装の人非人を防ぎ止めかねた。我々しかあいつらが憚らないが、皆も瀕死になったことが幾回あった。こういうような仮相がいつまで維持できるのかと、我々の自問であった。」

「12月19日、6人の日本兵士が裏からドアを開けるため、うちの庭園の塀を越えてきた。僕が駆けつけてかんかんに怒った時、一人の兵士がピストルを抜こうとしたが、僕が叫びながら近衛軍のバッジを見せたので、すぐに取り戻して、いやいやながら出て行った。いままで僕のドアはあいつら暴徒に開け放さない…庭園に300～400人の難民がいた…人数ははっきり分からないが…冬を越すにむしろ、古いドアや窓、トタンを使って粗末な部屋を作ったことがある。」

「12月24日、過去数週間こんなに多い死体を見、恐ろしい事件を味わった僕が、やはり理知を保ち出来る。クリスマスを祝う気持ちなんかとんでもない。だが

この目でそれぞれ暴行を見たい。そうするこそ、目撃者として証明できる…そういうような残酷に向かって誰でも沈黙にならない。」

「1月30日、50人の中国人が漢口路で僕の車を止めて、日本兵士に強姦されようとする女性を救おうと願っていた…財物を残らず奪い去った家屋であった。棺おけの安置していた隣の部屋は稲わらやゴミだらけで、兵士一人がそこに女性を強姦しようとした。僕に必死に廊下まで引っ張られた彼が、周りの中国人と僕の車を見た途端、近所の廃墟へ逃れた。ほかの日本兵士に気をつけられないようにと、僕が出口で小さな声で不平をこぼした人々を帰させた。」

1200ページのこの日記が戦後一時的に埋もれたが、ようやく世に知られるようになって、南京にあった残虐な行為の証拠ともなった。日本軍隊の脅威、恐喝、暴力まで耐えて、ラーベさんたちが25万人以上の難民を救助した。

南京での暴行はただの発端で、ひしひしと迫ってくる日本軍隊に面した中国民衆が恐れて受動であった。しかも中国国民党が共産党と連合して共同の敵に抵抗したが、1938年から連合が破裂の方向を取った。

1938年2月28日、南京から離れたラーベが上海を経てドイツへ帰国。ベルリンで講演を行い、写真や報告、自分の撮った映画を公開することによって、政府や民衆が中国で発生した行為に注意しようと、暴行の指摘に懸命した。それに日本軍隊の暴行を止めるため、ヒトラーに書面を奉ったが、これら活動の名で逮

捕されゲシュタポに三日間尋問されることとなった。

幸い、ジーマンス会社の介入で釈放。しかし、南京大虐殺についての講演や報告が一切禁止。ところが、差し押さえた映画など証拠としての記録が保ち続けた。ラーベがジーマンス会社のアフガニスタン事務所で比較的的安全に働いていた。

それと同時に、日本が中国へ侵略し続けて、10月21日広州を手に入れたまもなく、12月25日中部における工業都市武漢も陥落。年末に、中国中部南部の都市が殆ど敵に占拠された。

1939年5月、モンゴルへも侵入しようとした日本軍が、ソ連モンゴル連合軍に大いに打ち破れた。ヨーロッパ大陸には、9月1日ドイツ軍がポーランドへ侵入したので、二日間後イギリスやフランスがナチスに宣戦。第二次世界大戦爆発。

1940年9月、日独伊3ヶ国条約が調印され、二戦後世界分割協定に基づいて枢軸国形成。日本軍が南京で汪精衛政権をでっち上げた。

1941年4月日本とソ連とに間に「日ソ中立条約」が締結され、ソ連の軍事脅威を排除し、南部戦線が中国および東南アジアへのコントロールが強めるため、軍事力結集ができるようになった。12月1日、東条英機内閣と相談した天皇が、太平洋戦争の開拓を決心。

12月7日、真珠湾攻撃によって太平洋戦争爆発。初期海戦の成功や過度拡大の結果、日本軍が各地で敗退し始めた。

戦争が1945年まで続けた。8月6日と8月8日、アメリカが広島や長崎に原子爆弾を連続投下、12万人の死者や14万人の負傷者が出た。8月14日、日本が無条件降伏。

連国軍に占拠された日本が、二度と戦争を起こらずことや、中国を含めてすべての植民地の放棄を受諾した。日本陸軍と海軍の軍部を解散、武器や軍備を廃棄した。1100万以上の中国人や200万に近い日本人を含めて、二戦中出た死者が6000万人以上である。日中戦争に死んだ人数がおよそ3000万から3500万までと、中国の言明である。

日本の敗戦後まもなく、(中国)国民党と共産党との間に中国内戦が爆発。1949年1月、毛沢東の共産党軍隊が戦うことなく北京を収めて、年末に全中国をコントロール出来た。蒋介石や国民党軍隊が台湾へ撤退し、台北が中国臨時首都と宣言した。

ラーベが戦後国内でナチと公開に指摘され、相次いでソ連とイギリスに逮捕されたが、調査の結果、悪行なんか働かなかったのが釈放。

1946年6月、連国軍から非ナチ証明書を受けたが、落ちぶれて惨めであった。毎月中国友人から食品や金が送ってくれて生活を維持できることが感激だったが、1949年（中国）国民党が共産党に負けた時からこの郵送も中絶。

戦犯の監禁や尋問活動は1946年5月から東京に始まって、1948年11月まで続けた。極東国際軍事裁判所で有罪の判決を受けた官僚や軍人が4000以上。28名のA級戦犯の中で、南京大虐殺により刑罰を受けたのが二人しかいない：日本陸軍大将松井石根（戦時の支那方面軍司令官）と広田弘毅（戦時の日本外相）。二人とも死刑。

大虐殺に関係ある軍人が南京でも監禁、裁判されたが、ただ四人しかいなかった：日本陸軍中将谷寿夫、「百人斬」の参加者三人（向井敏明、野田毅、田中軍吉）。四人とも死刑。

1950年卒中によりこの世を去った。

付言：

日中戦争や第二次世界大戦の間日本軍が侵した非道行為を、日本は相変わらず過小評価し、ひいては否認。2005年初めの頃、日本文部省が通過した新たな

歴史教科書の中に、責任負わずに南京大虐殺を一つの「事件」とし、中国侵入を「進出」と変え、大量な女性が強姦されたことなどに一切言及しない。歪曲した教科書の発行が隠れた日中間の差し迫った情勢にますます火に油を注いだ。中国国内の反日デモの参加者が日本領事館や日系企業を包囲して、日本政府が戦争中の非道暴行を承認し謝ろうと要求した。

評論：

ナチは英雄にならないのか。1200名のユダヤ人を救助したので、ナチのOskar Schindlerが英雄と人々が考えられる。だが25万中国人を救助した活動の中に、ジョン・ラーベがキーポイントであった。単にこれによって、彼が20世紀の大切な英雄だと考えられるべきだ。しかし彼が魅力のあるSchindlerよりもっと頑固な人、ナチス理想のためにもっと忠実の人である。「中国の災難に僕が十分同情を寄せている。だが僕が信じている、ドイツがすべてを超えると。そしてナチスの指導者の一人として、我々の政治体制の正確性と。僕がこの体制に完全服従。」と言う、1938年ラーベ講演の一部の内容から見ると、その通り。中国にいたごろ、ナチス暴行など一切聞いたことがないと、ラーベが戦後こう述べた。しかもドイツ政府から手当をもらって、南京にあるドイツ学校を支えるため、彼がただ党员としての身分を保った。ラーベの性格が同僚に深く印象を残したが、彼の政治信仰は人々を困らせたようである。「ナチスの範囲に非常に詳しい。しかも数週間の付き合いによって、彼がいかにもすばらしい人と、いかにも度量の広い人かと分かる。彼の性格と、リーダーに対してのお世辞とは、調和に繋がり

かねる。」と、20世紀30年代に中国にいた宣教師でもあり医者でもあるロバート・ウイルソンが、このようにラーベのことを述べた。

<http://www.moreorless.au.com/heroes/rabe.html>

More information

Links are to external sites.

China – A Country Study (Library of Congress Country Studies Series)

Japan – A Country Study (Library of Congress Country Studies Series)

Online Documentary – The Nanking Atrocities

China News Digest – Nanjing Massacre

Century of China – Japanese War Crimes

Research Centre for Humanities Computing – The Tokyo War Crimes Trials

Gendercide Watch: The Nanjing Massacre

Page created on 3 January 2003. Updated 21 April 2005.

www.moreorless.au.com 2000–2005